

◆ 巻頭言

女性の命とリプロダクティブ・ヘルスの普遍的アクセス

石井 澄江

2008年9月、国連において2015年が達成期限となっているミレニアム開発目標（MDGs）の中間評価が実施された。全ての目標において進捗の遅れと地域間格差が指摘され、とりわけ「妊産婦の健康の改善」（MDG5）が最も遅れていると報告された。世界中で1分間に1人の割合で、妊娠・出産を原因として女性が命を落としている状況は過去20年来ほとんど改善されていない。その女性の死亡の99%は途上国で起きている。まさにお産は命がけなのである。残念ながら最近の日本ではこれが他人事ではなくなっている。

昨年、日本政府は北海道洞爺湖サミットにおいて「国際保健に関する洞爺湖行動指針」をまとめあげ、今年の議長国イタリアへの引き継ぎを行った。2000年の九州・沖縄サミットに続き「保健」をサミットの課題とし、初めて母子保健対策の強化を訴えた。

サミットの成果を実施に移すとき我々が主張するのは、従来の母子保健においては、「子」にのみ注目が当たり、女性・母はいつも忘れられていたという事実である。MDG5は女性・母の命を救うという大きなチャレンジであり、その意味で2008年1月に「2015年までのリプロダクティブ・ヘルスの普遍的アクセスの確保」という新たなターゲットがMDG5に正式に追加されたことは、大きな前進であったと言える。

リプロダクティブ・ヘルスの推進によって、望まない妊娠と安全でない中絶を防ぎ、年間7万人にもものぼる女性の命を助けることができる。希望するすべての人がいつでも・どこでも「リプロダクティブ・ヘルス」サービスを受容でき、MDG5の「妊産婦の死亡を4分の1に削減する」目標を期限内に達成することは不可能ではない。世界で使われている軍事費の1日～1.5日分を毎年振り当てるだけでよい。日本を含むG8の国々、そして世界の指導者たちの英断が欲しい。



PROFILE

石井 澄江
(いしい すみえ)

1948年、東京生まれ。ジョイセフ(家族計画国際協力財団)事務局長。海外プロジェクトと政策提言等のアドボカシー事業等を手がけ、各種国連・国際会議にNGO代表、日本政府代表団顧問として参加。JICAリプロダクティブ・ヘルスプロジェクトのリーダーとしてベトナムに赴任(97～98年、00～02年)。G8NGOフォーラム貧困・開発ユニットチームリーダー(08年)。